

書籍のご案内

西原大輔著

『日本人のシンガポール体験』

——幕末明治から日本占領下・戦後まで』

広島大学 教育学研究科

(一社) 日本シンガポール協会 会員 西原大輔

日本人は、シンガポールとどのようにかかわってきたのでしょうか？ その歴史は、羅越国で虎に食われたとされる、平安時代の高丘親王の伝説にまでさかのぼることができます。一方、シンガポールに住んだことが確実なのは、在留邦人第一号の音吉です。幕末の1850年代のことでした。『日本人のシンガポール体験』は、高丘親王や音吉に始まり、第二次世界大戦の日本占領期を経て戦後に至るまでの、日本人とシンガポールのかかわりを述べた本です。

この単行本の元になったのは、本誌『シンガポール』の記事です。2000年から2011年まで50回にわたり、「日本人のシンガポール体験」と題して連載されました。この連載原稿を全面的に書き換え、新しい情報も加えて書籍化しました。

私は、1992年から翌年にかけて、シンガポール国立大学日本研究学科で教鞭を執りました。以来、20年以上にわたってシンガポールを訪れ、日本人の足跡をたどってきました。『日本人のシンガポール体験』を読むと、意外な場所が著名な日本人と深くかかわっていることに気付くことでしょう。

ドービー・ゴート駅前の旧キャセイ・ビルには、映画監督小津安二郎が住んでいました。井伏鱒二が戦時下に、The Straits Times 改め The Syonan Times の編集責任者として、セシル・ストリートのストレーツ・タイムズ社に勤務していたことなど、もっと知られるべきではないでしょうか。夏目漱石が昼食をとったのは、現在のブギス・ジャンクションの敷地にあった松尾旅館です。永井荷風の『ふらんす物語』は、タンジョン・パガの埠頭で話が終わります。島崎藤村は、カトン海岸のホテルに泊まりました。二葉亭四迷が火葬されたのは、現在のケント・リッジ公園です。また、二葉亭の終焉之碑が日本人墓地公園にあることは、よく知られています。

『日本人のシンガポール体験』の本のカバーには、日本画家今村紫紅の《熱国之巻》という、重要文化財の絵を使いました。ここに描かれている水上集落は、セントーサ島の隣のブラニ島にありました。セントーサ島に渡るモノレールの左手にあるコンテナ・ターミナルがその場所に当たります。このほかにも、横山大観、竹内栖鳳、小出櫓重、前田青邨、吉田博、藤田嗣治、宮本三郎といった著名な画家が、シンガポールの絵を描いています。

拙著『日本人のシンガポール体験』を通じて、シンガポールの新たな魅力を発見していただくことができれば、著者としてこれに勝る喜びはありません。

目次

第一章 明治維新まで

高丘親王の伝説／最初の在留邦人音吉／幕末の遣欧使節団

第二章 明治文学の中のシンガポール

文明開化期／森鷗外と夏目漱石／永井荷風と二葉亭四迷

第三章 寄港者が見たもの

港の光景／熱帯都市の魅惑／娘子軍および政治活動家

第四章 大正・昭和の美術と文学

シンガポールを訪れた芸術家／金子光晴と森三千代／寄港した文学者たち

第五章 シンガポール陥落

マレー作戦／徴用作家井伏鱒二／第二次徴用作家たち

第六章 昭南島時代

日本占領下での統治／昭南島の日本文学／昭南を訪れた文化人

第七章 第二次世界大戦後

チャンギー刑務所／客船から飛行機へ

書籍名：『日本人のシンガポール体験
——幕末明治から日本占領下・戦後まで』

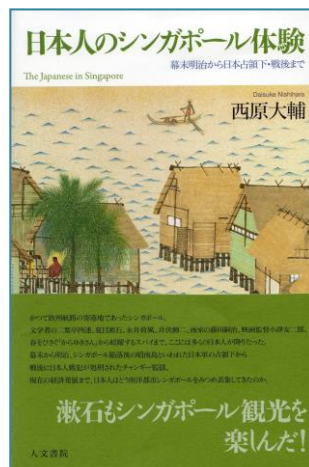
著者名：西原大輔

出版社：人文書院

発行：2017年3月

価格：3,800円（税別）

ISBN：9784409510742



この書籍は当協会にて販売しています。在庫状況や送料などは、事務局までお問い合わせください。（事務局）